

祥伝社新書

SHODENSHA
SHINSHO

英国人記者が見た 連合軍戦勝史観 の虚妄

Henry Scott-Stokes
ヘンリー・S・ストークス

英国人記者が見た 連合軍戦勝史観の虚妄
ヘンリー・S・ストークス



9784396113513



1920221008007

ISBN978-4-396-11351-3
C0221 ¥800E

定価：本体800円＋税



H・S・ストークス
Henry Scott-Stokes

1938年英国生まれ。61年オックスフォード大学修士課程修了後、62年フィナンシャル・タイムズ社入社。64年東京支局初代支局長、67年ザ・タイムズ東京支局長、78年ニューヨーク・タイムズ東京支局長を歴任。三島由紀夫と最も親しかった外国人記者としても知られる。著書に『三島由紀夫生と死』（徳間書店）、『なぜアメリカは、対日戦争を仕掛けたのか』（祥伝社新書、加瀬英明氏との共著）。

「日本は戦争犯罪国家」論を
信じて疑わなかった
ベテラン
ジャーナリストの
歴史観は、
なぜ変わったのか？



歴史の嘘が 見抜けると、 評判の ベストセラー ！

祥伝社新書

祥伝社
新書
351

英国の知性が見た、日本の戦後（本書の目次）

- 第1章 故郷イギリスで見たアメリカ軍の戦車
- 第2章 日本だけが戦争犯罪国家なのか
- 第3章 三島由紀夫が死を賭して問うたもの
- 第4章 橋下市長の記者会見と慰安婦問題
- 第5章 蒋介石、毛沢東も否定した「南京大虐殺」
- 第6章 『英霊の聲』とは何だったか
- 第7章 日本はアジアの希望の光
- 第8章 私が会ったアジアのリーダーたち
- 第9章 私の心に残る人々
- 終章 日本人は日本を見直そう

第二章 日本だけが戦争犯罪国家なのか？

チャーチルの聞くに堪えない日本人への罵詈雑言

私は最近、ウィンストン・チャーチルが妻のウィニーとやりとりした書簡を、読む機会があった。

日本人についてさまざまなエピソードを書いているが、許容範囲を逸脱した差別的表現で、日本人を侮蔑している。イギリス人からそのような醜い言葉が発せられたのを、耳にしたことはない。罵詈雑言というか、これでもかと貶める表現を使っていた。

戦争では誰もが敵に対して怒りを抱いて、感情的になる。しかし、チャーチルの言葉遣いは、その範疇を逸脱していた。チャーチルがそこまで口汚く日本を罵った背景には、植民地支配の体験がある。数百年にわたって栄華を極めた大英帝国——日が沈むことはないと形容された——その版図が、あろうことか東洋の黄色い小人たちによって、一瞬にして崩壊させられてしまったという悔しさと、怒りがあつたのだ。

第二次大戦を戦った世代には、そうした根深い怨念が、日本人に対してあつた。『フィナンシャル・タイムズ』社で私の上司だった論説主幹のゴードン・ニュートンも、そうした一人だった。彼は私を日本に派遣して、『フィナンシャル・タイムズ』の東京支局を開設させた。

ゴードンやその友人には、日本人と戦場で戦った経験を持つ者が多かった。彼らにとって、日本人は憎しみの対象だった。日本人がきわめて「野蛮だ」という感情を抱いていた。一部ではあつたが、そうした特別な感情を日本人に対して持つ、イギリス人がいたことは事実だ。

第二次大戦が終わり、五〇年代になって、私は黒澤明の『七人の侍』や、市川崑の『野火』などの映画を見て、新鮮な衝撃を受けた。日本人は、何百年にわたったイギリス植民地支配の歴史のなかで出会ったことがない、「別次元」の存在だと気づいた。

イギリスは何百年もかけて大帝國を建設し、その帝國を維持した。その間に、インド人をはじめアジアのさまざまな民族と戦った。もちろん、インド人との戦闘も、熾烈を極めた。アフガニスタンや、北パキスタンの敵も、手強い相手だった。

しかし、日本人はそうした「強い敵」をはるかに凌駕していた。日本人はそうした植民地支配を受けた人種と、まったく違っていた。日本が大英帝國に軍事進攻した途端に、何百年も続いた帝國が崩壊した。イギリスは日本のマレー進攻によって、催眠にかけられてしまったようだった。日本軍のあまりの強さに、降参するしかなかった。

そうした現実と、収容所などで受けた扱いがいまって、「野蛮で、残虐な日本人」の

イメージが強調された。実際に、酷い扱いを受けた人々もいた。個人的に私が聞いた話もある。

もつとも、イギリスの収容所で不法に虐待された日本人の多くの証言もあるから、お互いさまだった。イギリス人のなかにも、教養を欠いた、残忍な者がいた。

私がアジアに初めて来たのは、一九六四（昭和三十九）年だった。私は若いユダヤ人女性と結婚したばかりだった。カナダ人とユダヤ人の混血で、東アジアに何人もの親戚がいた。香港、バンコク、シンガポール、カルカッタといった具合に、あちらこちらに従兄弟がいた。

シンガポールでは、マックス・ルイスという名の従兄を紹介された。ポーランド系ユダヤ人で、ソフト・ドリンクのビジネスの展開のために東アジアに来て、シンガポールの外資ビジネスの中心的人物の一人となっていた。

マックスは、日本軍が進攻してきた時に、シンガポールにいた。マックスは楽しい、愛すべき人物だった。彼は「日本軍によって収容された時に拷問を受け、子どもを持つことができなくなった」と、語った。私も新妻も意味がよく、理解できなかった。

彼は「拷問されたために、生殖機能を失ってしまった」と、告白した。その時は日本軍

に対して、憤りを覚えた。屈強なユダヤ商人で成功した人物が、ただひとつできなかったのが、子を持つことだった。

アジアの国々を独立させた日本の功績

当時、私は『ロンドン・タイムズ』東京支局長だったが、白人世界では戦後一貫して、日本への憤りが蔓延していた。そこには、怨念があった。日本軍の戦いぶり、この世の現実と思えないほど、強かった。イギリスは何百年も続いた植民地から、一瞬にして駆逐された。戦闘に敗れたというだけではない。栄華を極めた大英帝国の広大な植民地が、一瞬にして消えたのだ。この屈辱は、そう簡単に忘れられるものではない。

イギリスは一〇六六年にノルマン人の侵略を受け、国土を占領されたが、ナポレオンや、ヒトラーの侵略を斥けた。だが、その帝国の植民地がなんと有色の日本人によって奪われた。イギリス人にとって、有色人種に領土を奪われ、有色人種が次々と独立国をつくったことは、想像を絶する悔しさだった。

日本に原爆が落とされた。その悲惨さは、筆舌に尽くし難い。アメリカは原爆を投下する必要が、まったくなかった。生体実験のように、人間に対し原爆を投下した。そこに

は、「辱めを与える必要性」があった。日本人を徹底的に打ち砕き、完膚なきまでに叩きのめさねばならなかった。勝者の正義などは、まさに「建前」で、復讐をせずに

ウイン・ド・ドレッシング

日本は、元寇の時も侵されなかった。しかし第二次大戦で敗れて初めて、アメリカ軍が本土を占領した。これは、日本を「部分占領する」とうたったポツダム宣言に、違反したものであった。ポツダム宣言は、日本軍の無条件降伏のみを要求し、「われらは以下の条件から逸脱することなし」と記しているから、日本は有条件降伏をしたのに、マッカーサーは日本軍を武装解除すると、日本が無条件降伏したことに、すり替えた。アメリカ軍は七〇年近い年月が経っても、そのまま日本に居座っている。

英語で「侵略」というと、ひとつの国が他国の領土へ武力を使って、強制的に入ってゆくことを意味する。この定義では、日本は大英帝国の領土である植民地に侵略したと、認められる。

しかし、加瀬氏の話を聞いて、私は違った視点を持ち、認識を改めるようになった。日本は大英帝国の植民地を侵略しただけでなく、欧米の植民地支配を受けたアジア諸民族が、独立するのに当って、大きな役割を果たしたのだった。

日本は欧米のアジアの植民地を占領し、日本の将兵が宣教師のような使命感に駆られて、アジア諸民族を独立へ導いた。

日本はアジア諸民族に、民族平等というまったく新しい概念を示して、あつという間に、その目標を実現させた。植民地支配という動機とは、まったく異なっていた。日本はアジア諸民族が独立することを、切望していた。

これは、まぎれもない事実だ。アジアの諸民族にも、独立への期待が強くあった。西洋人はこうしたまったく新しい観点から、世界史を見直す必要がある。西洋

西洋人はこうした史観を持っていないし、受け入れていない。

「白人の植民地」を侵した日本の罪

日本がアジア植民地を侵略したのは、悪いことだったろうか。侵略が悪いことなら、世界史で、アジア、アフリカ、オーストラリア、北米、南米を侵略してきたのは、西洋諸国だ。しかし、今日まで、西洋諸国がそうした侵略を謝罪したことはない。

どうして、日本だけが欧米の植民地を侵略したことを、謝罪しなければならないのか。東京裁判では、「世界で侵略戦争をしたのは、どちらだったか」ということに目を瞑って、

日本を裁いた。

それは侵略戦争が悪いからではなく、「有色人種が、白人様の領地を侵略した」からだった。白人が有色人種を侵略するのは『文明化』で、劣っている有色人種が白人を侵略するのは『犯罪』であり、神の意向に逆らう『罪』である、と、正当化した。

日本には「喧嘩両成敗」という便利な考え方もあって柔軟だが、欧米人はディベート思考で、白か黒か判定をつける。もし日本が正しいなら、間違っているのは欧米側となる。だから、あらゆる手を使って、正義は自分の側にあると、正当化しようとした。

東京裁判は復讐劇であり、日本の正当性を認めることなど、最初からありえないことだった。認めれば、自分たちの誤りを認めることになってしまう。広島、長崎に原爆を投下し、東京大空襲をはじめ全国の主要都市を空爆して、民間人を大量虐殺した「罪」だけでなく、もっといえば、世界で侵略を繰り返してきたその正義の「誤謬」が、明らかにされることであつては、けつして、ならなかった。それが、連合国の立場だった。

私にクラウディアという従姉妹がいる。貴族のような生活をしていた。乗馬や、犬を愛し、広大な土地を所有していた。クリスマスなどには大邸宅で盛大なパーティーを催した。現在の妻と結婚を考えていた頃に、クラウディアのパーティーに、初めて同伴して出

席したことがあった。一九七三年だった。

妻は日本女性なので、見た目がとても幼く、西洋人からは十二歳ぐらいに見えた。父が彼女があまりに若く見えるので、「法律を犯しているんじゃないだろうな。子どもを拉致しては、だめだぞ。たいへんなことになるぞ」と、心配したほどだった。

私はパーティーでクラウディアに、歩み寄った。未来の妻は少し離れたところにいた。クラウディアは私が結婚も考えている女性で、日本人だと聞いて憂慮していた。

クラウディアの親族の老婦人と家族が戦前、香港に住んでいて、家族が日本軍に捕まり収容所へ入れられていた。一族は収容所で三年半を過ごした。悲惨な生活だったというが、生還した。そして従姉妹はパーティーで、私に「新しい家族の一員を迎えることができて、嬉しいわ」と重い口調で言い、「私たちはけつして貴方の気持ちに逆らおうとは思っていないわよ。貴方の決心を尊重するわ」と、付け加えた。

私は彼女から、収容所のことを聞いた。悲惨な生活といっても、やわらかいトイレットペーパーもなく、聖書のページを使うことを余儀なくされた、という程度のことだった。

イギリス最大の屈辱、シンガポール陥落

イギリス人は公的にも、軍事的にも、日本に対する見方だけでなく、世界の見方を一〇〇パーセント見直さなければならなかった。

一九四二年一月にマニラが占領されたが、イギリスにとってさほどの関心事ではなかった。最大の関心事は、シンガポール、マレーシア、ビルマ、インドだった。日本が第二次大戦に参戦すると、アジアの植民地での戦闘が始まったが、日本軍は考えられない強さを示した。その片鱗は、一九〇五年の日露戦争の勝利でも示されたが、イギリスは本当の意味で、日本軍の強さを知らなかったから、脅威だと思っていなかった。しかし、日本軍がシンガポールを目標としてマレー半島を南下すると、初めてその強さを体験した。

もともと衝撃的だったのは、『プリンス・オブ・ウェールズ』と『レパルス』という大英帝国海軍が誇る二隻の戦艦が、日本の航空攻撃によって、わずか四時間で撃沈されてしまったことだった。それまで航空攻撃で、外洋を疾走する戦艦が、撃沈された前例がなかった。

チャーチルは若くして、海軍大臣に就任したことがある。チャーチルが太平洋へ戦艦を派遣する決定を下したが、防空の配慮をまったく払っていなかった。イギリスの誇りは陸

軍ではなく、海軍にあった。その誇りが、一瞬にして貶められた。イギリス艦隊は日本の航空攻撃に対して、ほとんど反撃できなかった。イギリスは、軍事面から日本の力と、イギリスの海軍力を見直す必要に迫られた。

日露戦争での日本の勝利は、世界中の有色人種に「有色人種も、白人に勝てる」ことを示して、前例のない衝撃と、希望を世界の有色人種に与えたが、西洋の軍事力の相対的な弱さについて、第二次大戦まで西洋人が体感することがなかった。だから、マレーで起こったことは、大きな衝撃だった。そのようなことが起ころうとは、想定だにしていなかった。

まだ海軍は海上で戦う力が残されていたが、陸上ではそういかなかった。インドはインド人のもではなかった。イギリスのものだった。インドはイギリス領だった。私はそう教育された。だが、インドを支配するために、駐留していた兵力は、限られたものだった。

日本軍が突然、マレー半島に上陸し、まったく次元の違った戦いが始まった。チャーチル首相も、面食らった。

シンガポール防衛軍のパーシバル司令官は、金縛りにでもあったかのように、まったく

戦うこともせずに、戦意を喪失し、降伏した。日本軍の司令官もイギリス軍の弱さに、驚いたことだろう。日本陸軍はそれほど強かった。

イギリスだけではない。アジア各地にオランダ軍など、西洋各国の軍隊が展開していたが、あつという間に日本軍に敗れてしまった。日本は短期間にそれだけの地上軍を展開する力を、持っていた。

西洋諸国の植民地駐留軍は、それに見合う兵力を有していなかった。大英帝国にとってシンガポールは、香港や、上海につぐ重要な拠点だった。シンガポール陥落はイギリスにとって、植民地支配の終わりを象徴していた。

『猿の惑星』が現実となったときの衝撃

日本軍は、大英帝国を崩壊させた。イギリス国民の誰一人として、そのようなことが現実起こるなどとは、夢にも思っていなかった。それが現実であると知った時の衝撃と、屈辱は察して余りある。

ヒトラーがヨーロッパ諸国を席卷して、大ゲルマン民族の国家を打ち立てようとしたことも、衝撃的だったが、それでも、ヒトラーは白人のキリスト教徒だった。われわれは自

分たちと、比較できた。

しかし、唯一の文明世界であるはずの白人世界で、最大の栄華を極めていた大英帝国が、有色人種に滅ぼされるなど、思考の範囲を超えている。理性によって理解することのできない出来事だった。『猿の惑星』という映画があつたが、まさにそれが現実となったような衝撃だった。誰一人として、『猿の惑星』が現実になるとは、思っていまい。映画の世界のことで、想像上の出来事だと思っている。

人間——西洋人——の真似をしていた猿が、人間の上に立つ。それが現実となったら、どのくらいの衝撃か、想像できよう。日本軍はそれほどの衝撃を、イギリス国民に与えた。いや、イギリスだけではない。西洋文明そのものが衝撃を受けた。

アメリカは、ヨーロッパ諸国に比べると、日本についてもっと研究をしていた。アイヴアン・モリス、ドナルド・キーン、エドワード・サイデンステッカーなど高名な親日学者は、みなアメリカ軍によって養成された。軍学校で日本語を習得し、情報将校として服務した。

ヨーロッパでは、フランスは文化面で日本の影響を強く受けたが、イギリスの場合は限られていた。江戸末期の一八六〇年代にアーネスト・サトウというイギリスの外交官が日

本を訪れ、四〇年ほど行き来した。そういえば、オックスフォードの私の学友で、歴史家の萩原延壽が朝日新聞紙上に、アーネスト・サトウの伝記を五〇〇回にわたって連載し、その後本にした。時々、萩原は自分が手書きした英文に赤入れしてほしいと、私に頼んできた。

いずれにせよ、イギリスは日本と同盟関係を構築した。だが、イギリス大衆一般がそうした外交的な関係によって、日本についてよく知るようになったかと言えば、さして浸透していなかった。日本への理解は、きわめて限られていた。

今日、オックスフォード大学には多くの日本専門家がいて、政府の財政的支援も得ているが、昔はそうではなかった。日本研究はいまだに中国研究と同レベルまで、高まっている。オックスフォード大学には、日産インスティテュートなどさまざまな部門がある。

無知が助長した日本人への憎悪

イギリスは数百年間にわたって、負けを知らなかった。大英帝国を建設する過程における侵略戦争は、連戦連勝だった。私はイギリスは戦えば必ず勝つと思っていたし、学校でそのように教えられた。私は一面がピンクだった地球儀によって、教育を受けた。イギリ

スの領土がピンク色で、示されていた。

ところが、第二次世界大戦が終わると、植民地が次々と独立して、ピンク色だった世界が、さまざまな色に塗り替えられてしまった。

大英帝国は植民地を徹底的に搾取することで、栄華を保っていた。お人好しの日本人が、台湾、朝鮮の経営に巨大な投資を行なって、本国から壮大な持ち出しをしたのと、まったく違っていた。どうして、イギリスが植民地支配なしで、栄華を維持できたことだろう。日本の手によって、戦争に必ず勝つはずだったイギリスが、大英帝国の版図をすべて失った。

『平家物語』ではないが、無常を感じざるをえない。栄華を極めた人々は、栄華に溺れた。ついには戦うこともせず、降伏してしまった。

シンガポールの守りは固かったが、海からの攻撃に備えたものだった。砲台がみな海を向いていた。シンガポールの背後をつく、陸上からの攻撃から、守るように造られていなかった。

アーネスト・サトウのような知日派外交官は、稀有だった。今日ではその反省から、イギリスでは日本に精通した外交官を育成している。二年間鎌倉で日本語を身につけなが

ら、日本を学ぶ。いまでは、日本に精通した外交官を、養成できるようになっている。

だが、戦前は違った。イギリスが犯した最大の失敗は、日英同盟を破棄したことだった。私のように日本に五〇年もいて、日本人の妻を持ち、日本で子育てした者は、プロの知日派と見なされる。そうした知日派は日英同盟の破棄が間違いだったと、全員が語っている。歴史家で、『源氏物語』を最初に訳したアーサー・ウェイリーなども一九二〇年代に活躍したが、当時、イギリスには知日派はいたが、きわめて少数で影響力を持てなかった。イギリス人の目は、ヨーロッパに集中していた。

第二次大戦後の日本のイメージは最悪だった。

フランスにマーガリー・デュラスという、『広島モナムール』を著した作家がいた。英語では『広島マイ・ラブ』になる。日本人への同情に溢れており、一九五〇年代に話題を呼んだ。イギリスにそういう人は、いなかった。

ロナルド・ソールが捕虜収容所を描いた絵画は、日本を世界に広めたものだ。マレーの収容所で過ごした日々を、描いていた。誰もそのような絵を、見たことがなかった。私を含めて、イギリス人が日本人に対して持った印象は、人間ではないというものだった。

『サンデー・プレス』と呼ばれる日曜新聞はセンセーショナルな話題を取り上げるが、戦

後一貫して、日本人についてネガティブな記事が掲載された。

イギリスでは、日系人コミュニティが形成されることがなかった。この点、日系人社会が多く存在する、アメリカと違っている。アメリカに多くの日本人が移民していたという、違いがある。イギリスに居住していた日本人の数は、わずかでしかなかった。それに、アメリカは太平洋を隔てて、日本と向かい合っていた。距離的に遠く隔たっていたが、相互に干渉する、さまざまなテーマがあったので、日本人と係りを持たざるをえなかった。

戦勝国が日本を裁くことへの違和感

私の日本への見方が変わったのは、一九五〇年代に入ってからだった。

バンダー・ポストの一九五三年に出版された『バー・オブ・シャドー』については、前述した。感銘を受けて、学校の後輩たちに読んで聞かせた。日本人について、もっと理解しないといけないと、思った。日本人を人種的に差別するのは、公平でないと感じた。

戦後、イギリス人がドイツ人に会った時にとる態度も、改めるべきだと思うようになった。ドイツ人も人間だと、思うようになった。日本人に対しても、そうすべきだと思った。

が、それはドイツ人に対する感情を正すよりも、はるかに難しいものだった。

ドイツからの謝罪が、イギリス人の心を動かした。あらゆる機会に、ドイツは謝罪に努め、自分たちも人間であることを示そうとした。そうしたことによって、イギリス人の態度も変わっていった。

『バー・オブ・シャドー』のなかのイギリス人将校は、「われわれは彼らにも同情する」と語る。「彼らを人間として理解しなくてはならない。彼らを憎いからと言って、感情に駆られて処刑してはならない」と、訴えた。「何が動機だったのか。どうしてそのような行為に至ったのかを、理解しようと努めることが、大切だ」と、主張した。

このイギリス人将校は、ハラ軍曹の監督下にあった。バンダー・ポストは実際にマレーで、収容体験があった。ハラという名は仮名であろうが、小説は半分がフィクション、半分がノン・フィクションだった。

ハラは収容所の監督者で、ある満月の夜に酒を飲んで、気に食わなかった収容者を外に連れ出して、日本刀で首をはねる。これが訴因となって、戦犯裁判にかけられ死刑を求刑される。このイギリス人将校は、裁判で信条を訴えて、ハラの命を救った。私はこの小説によって、心を強く揺さぶられた。

私はボーディング・スクールの友人にも、どうして私が心を揺さぶられたのか、伝えたかった。今も、同じ気持ちだ。われわれは日本人に対してフェアでなかった。われわれに裁くことはできなかったはずだ。

国家には戦争をする権利がある。国家にとって最も重い権利だ。わが家に『フィナンシャル・タイムズ』で、私の上司だったJ・D・F・ジョーンズが著した、バンダー・ポスト伝がある。バンダー・ポストは、「われわれには彼らを裁く権利がない」「戦争犯罪人として処刑する権利はない」と、一貫して主張した。

この本は、短いものだった。後に書き加えられ、初版より厚くなっている。バンダー・ポストは、チャールズ皇太子の家庭教師も務め、イギリスで高く評価されている。

私は日本が大英帝国の植民地を占領したことに、日本の正義があると思った。それを戦後になって、まるで戦勝国が全能の神であるかのように、日本の罪を裁くことに違和感を覚えた。当時の世論に反して、そう思った背景にバンダー・ポストの存在があった。